サマリーの書き方体験

◉A さんの事例をもとに，サマリーを記載してみましょう。

①事例から基本ツール１・2，応用ツール⑱・⑲を記入してください。

②応用ツール⑱・⑲以外で必要な応用ツールは何番になるのかを考え，
基本ツール１「特別な医療等」の欄の該当箇所に✓してください。

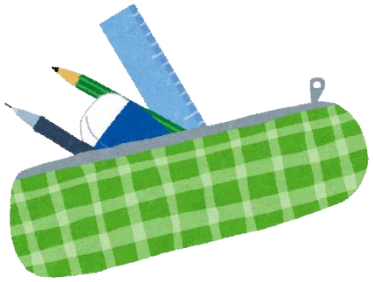
〇<u>在宅・施設系及び行政の方は，</u>

１事例　A さん「在宅での生活から入院」するまでの場面についてサマリーを記載してください。

〇<u>入院医療機関の方は，</u>

２事例　A さん「入院中から退院」までの場面についてサマリーを記載してください。

※サマリーの作成に正解・不正解はないので，事例を読んで個々にご本人 A さんや娘さんのイメージを膨らませて作成してください。



１事 例　Ａさん「在宅での生活から入院」までの場面

＊在宅・施設系サービス及び行政の方は，在宅での生活から入院するまでの場面について居宅のケアマネジャーになったつもりで，サマリーを記載してください。

【Ａさんの基本情報】

97 歳女性。
自宅にて娘Ｂさん（70 歳）と２人暮らし。

【Ａさんの自宅での状態】

移動は娘さんが抱きかかえて２階の寝室に移動。
日中は横になっていることが多く，起居動作，着替え等で一部，娘さんの介助が必要。
３ヶ月位前から飲み込みが悪くなり，食事は，おかゆやペースト状の煮物や和え物などをソファーに座って食べている。動作がゆっくりで時間がかかり疲れてしまうため，途中から娘さんに介助してもらっている。また，トロミのついた水分は嫌がり，イチゴ味のラムネを飲んでいる。
意志の伝達は簡単な内容であれば可能。
尿意・便意なく，排泄はオムツ使用。
排便は２～３日出なければ下剤使用。
入浴は娘さんが抱きかかえて入れている。

（経過①）

ある日の夕食後，ソファーに座っていたら急に苦しいと言い，呼吸が荒くなったため救急車を要請しＣ病院に搬送され入院となる。

Ｃ病院で誤嚥性肺炎と診断され，嚥下評価も悪いことから，医師より「経口摂取は禁止」と指示が出る。しかし，娘さんはその意味を理解・納得できず，胃ろうを勧められても「口からゆっくり食べさせるから」と拒否し，数日後に自宅退院の方向となる。

入院中の娘さんの言動やこれまでの介護状況に疑問を感じたＣ病院は虐待疑いとして地域包括支援センターに連絡。地域包括支援センターは，居宅介護支援事業所のケアマネジャーと連携し退院日に自宅訪問。

娘さんに経口摂取による危険性を説明し，今後の食事と栄養補給の在り方について話合いましょうと伝えるが拒否される。しかしながら，今後の生活を考えると何らかの介護サービスの利用が必要と判断されたため，暫定で介護サービスを調整することを提案し了承得られる。

Ｃ病院退院後，経口摂取を続けたことから数日後に発熱と震えあり再度，救急車を要請しＣ病院に入院を依頼。しかし，娘さんが治療を拒否したという状況からＣ病院に受入れを断られ，Ｄ病院に搬送。入院となる。

２事 例　Ａさん「入院中から退院」までの場面

＊入院医療機関の方は，入院中から退院までの場面についてサマリーを記載してください。

【Ａさんの基本情報】

97 歳女性。
自宅にて娘さんＢさん（70 歳）と２人暮らし。

（入院までの経過）

Ａさんが夕食後に急変しＣ病院に救急搬送された結果，誤嚥性肺炎と診断され，医師から経口摂取禁止の指示が出されるも，娘さんが納得せず指示を拒否。Ｃ病院退院後，地域包括支援センターと居宅介護支援事業所のケアマネジャーが暫定で介護サービスを調整している中，経口摂取を続けたことから，再び体調が悪化しＤ病院に救急搬送され入院となる。

（経過②）

Ｄ病院でも誤嚥性肺炎と診断され，舌の動きも飲み込みも弱く，医師より「経口摂取は難しい」と言われる。しかし，娘さんは胃ろうや必要以上の点滴は望まないと拒否し「口から食べられる」「母は食べると元気になる」「自分が母を看る」と言う。

ケアマネジャーに退院後の介護サービスの調整を依頼し，Ｄ病院で退院前カンファレンスを実施。訪問看護ステーションの看護師から，「食べるための体力も嚥下力もないので，今は点滴で栄養補給し，それと同時に食べるためのトレーニングをしながら徐々に経口摂取の方向に進めていくのはどうだろうか」と提案したところ，娘さんがこの内容を少し理解した。

この日から退院までの５日間の間に状態が悪化し，酸素が必要な状態になる。

Ｄ病院医師より心肺機能の低下もあり厳しい状態と説明されるも，娘さんは自宅退院を希望した。

退院後に訪問診療と訪問看護サービス，福祉用具の利用により娘さん中心の介護にて生活できるよう在宅サービスを調整。

娘さんは，毎日，面会するなかで，「もしかしたら死期が近いのか？」という気持ちが芽生える。

自宅退院。

【ＡさんのＤ病院退院時の状態】

意志の伝達はほとんど不可。
入院中はベッドに臥床し，体位変換，着替えは全介助。
移動は全介助でストレッチャー使用。
食事は禁食。
排泄はオムツ使用，入院中よりバルーンカテーテル挿入
排便は２～３日出なければ下剤使用。
保清は全身清拭。
酸素使用，末梢からの点滴。

３事 例　Ａさん　「～　その後　～」

【D 病院から自宅退院した日から亡くなるまでの状態】

　自宅退院日に訪問診療と訪問看護ステーションが入る。この時，意識レベル低下，下顎呼吸，血圧測定不可の状態になる。医師より「このまま亡くなりますね」と説明あり，驚いた様子の娘さんだったが「自宅に戻り心が決まりました。このまま傍で看取ります」と話す。２日後，娘さんより訪問看護ステーションに「呼吸をしていない。来てください」と電話が入る。

　訪問診療スタッフと訪問看護師と一緒に看取る。

　最後は，娘さんから「母が好きな色は黄色なので，黄色い服を着せます。母は綺麗な人でした」と言い綺麗に化粧をしてくれた。